

# ないえ会 会報 No.27

2021年3月20日

## ● 知的障がい者施設におけるコロナウイルス

集団感染現場での活動：生活介護 支援員 上村一貴



みみずくテイクアウトメニュー：フライミックス

## 知的障がい者施設におけるコロナウイルス集団感染現場での活動

生活介護 支援員 上村一貴

2020年8月、北海道より「新型コロナウイルス感染症に係る社会福祉施設等への応援職員の派遣協力依頼について」の募集がありました。これは集団感染が発生し職員が不足した施設に登録されている職員を、北海道が派遣する「介護職員等派遣事業」という事業です。私はこの事業に派遣職員として登録していたため、2020年12月5日～18日まで、コロナウイルス集団感染が発生した、障がい者施設（A施設）で業務を行ってきました。

### A施設における集団感染の経緯

男性棟では18名の利用者が生活し、そのうち13名が陽性ということだったが、実際には・・・

入所者 14名（陽性者9名）  
 ショートステイ中に感染した者 1名  
 感染し別棟から隔離された利用者 3名

最初に男性棟とは別の3名に陽性反応が出たのでそこに隔離。その後、男性棟でも陽性が出たため、保健所からの指示で、別棟の3名も男性棟で隔離。

その時点で男性棟には陰性の利用者さんもいたが、濃厚接触者として同様に隔離。

私が派遣されたA施設の男性棟では、18名の利用者が生活しており、そのうち13名の方が陽性という状態でした。この数字だけで想像すると、現場はどれだけ重苦しい雰囲気なのかと考えていたのですが、ほとんどの利用者が無症状だったため、一目では集団感染が発生している現場だと信じられませんでした。そのため利用者さんは恐らくいつも通り過ごしており、中には新しい職員が来た嬉しそうに歓迎して下さる方もいました。もちろんコロナウイルスに対する緊張感はありましたが、実際に利用者さんと接し、安心したことが印象に残っています。しかしコロナウイルスの病原体によって汚染されていることに変わりはないため、ゾーニングに基づくレッドゾーンに該当するということでした（次ページ「A施設でのゾーニング」参照）。そのため個人用防護具を着用した状態で業務に当たりました。個人用防護具は、防護服、N95マスク、キャップ、手袋（2重に着用）、ガウン、フェイスシールド、シューズカバーをグリーンゾーンで着用し、レッドゾーンから出る際はその都度、イエローゾーンで破棄します。

業務内容は主に、男性棟内の消毒と清掃、利用者さんのケア（検温、食事介助、清拭等）等でした。レッドゾーンにおいて特に重視すべきことが消毒と換気ということで、これらは2時間に1回の頻度で行いました。消毒はペーパータオルを消毒用アルコールで浸して行い、廊下やトイレはもちろんのこと、利用者さんが触れる頻度が多い箇所については居室の物も含めて行いました。また、床や汚物処理時の消毒は、次亜塩素酸ナトリウムを使用しました。換気については消毒と同時に行い、廊下やトイレ、居室の窓を開け行きました。居室に関しては、利用者さんの拒否やすぐに窓を閉めるということもあったため、無理のない範囲で行いました。

利用者さんのケアについては、何をするにも陰性の方から行うようにし、検温、Spo2（酸素飽和度）の測定は1日3回（朝、昼、夕）行いました。特にSpo2（酸素飽和度）の測定は、正常に呼吸が来ているか知ることができ、数値が90を下回ると肺に異常があり呼吸がしづらくなっている可能性があるため、状態を把握することが出来る重要な対応であるということでした。



防護服姿の上村支援員

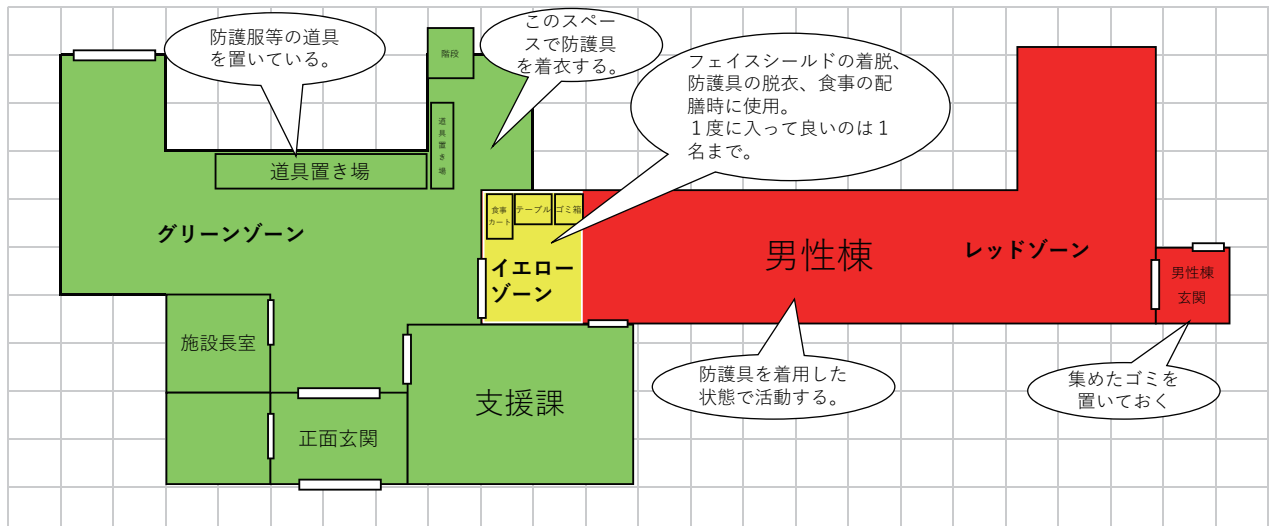
入浴は行わず、毎日清拭をして対応しました。清拭を行う際は、ディスプレイタオルやおしり拭き、シャンプータオル等を使用し、<page2に続く>

<page1 から> 基本的に使い捨ての物品を用いて対応しました。しかし、疾患等が理由で清潔を保たなくてはならない方や、失禁等で汚れた場合はシャワー浴を行い対応しました。シャワー浴の介助を行う場合は、個人用防護具を着用したままの状態、利用者さん1名に対し支援員1名で対応しました。

食事については、使い捨ての容器を用いて配膳し、メニューは平常時と変わらない物を提供しているとのことで

した。食後の処理方法は廊下や居室内にごみ袋を被せた状態のごみ箱が設置してあり、利用者さんは食事を終えると使用済みの容器をごみ箱に破棄していました。汚染物という扱いになるため一切分別はせず、毎食後、すべてのごみ箱のごみ袋を回収しました。回収したごみ袋は施設の外で保管し、定期的に専門の業者が引き取りに来ていました。

### A施設でのゾーニング



日中活動については、平熱で無症状の方が多かったのですが、居室で静養するという形を取り、平常時に行っている様な活動は実施していませんでした。しかし、自閉症の方等、利用者さんによっては、平常時と同様のスケジュールで活動している方もいましたが、男性棟から出ない行動のみでスケジュールを構成する等工夫をしていました。そんな状況ということもあり、少しでも利用者さんが楽しめる機会を増やすため、おやつの時間以外でもコーヒーやジュースを飲む時間を作るとか、食事のメニューを工夫する等の対応を行っていました。これについては集団感染が起きていない場合でも当てはまることだと感じました。利用者さんに楽しんでもらうということは、コロナ禍により様々な制限がある中でも、普通の日常生活でも大切なことだと思いました。

PCR検査については、利用者さんは鼻孔ぬぐい液から検査し、職員は唾液から検査を行いました。利用者さんの検査は、多くの利用者さんが唾液を出すように促しても困難なことから、鼻孔ぬぐい液から検査するタイプを用いたとのことでした。また保健所を通して行うため、検査結果が出るまで1日を要しました。私は派遣業務の最終日にPCR検査を受け陰性でした。

今回派遣職員として行った業務は緊張感がありました

が、とても良い経験になったと思っています。派遣の業務を行う前、テレビや新聞で取り上げられていることを理解しているつもりでしたが、それは漠然としたものだったのではなかったかと思えます。今回の経験を通してコロナウイルスによる集団感染は、本当に現実で起きていることで非常に身近なことであるということ、いつ起きてもおかしくないこと、なのだ実感しました。派遣での業務中、もしないえ福祉会で集団感染が起きた場合、利用者さんはその現実を受け入れることができるのだろうか、ということ度を考えていました。スケジュールの流れが変わり、精神状態が不安定になる利用者、レッドゾーンから出る可能性がある利用者、様々な課題が思い浮かびました。そのため万が一に備えておくことの重要性、職員一人一人の心構えが大切なのだと思います。また、支援員という役割を改めて考える良い機会にもなったと思っています。現場の状況がどんなに変わっても支援の本質は変わらず、利用者さんが安心して生活を送ることが出来るようにすることが支援だと思いました。

今回得たコロナに対する知識を活用する日が来ないことを願いつつ、この派遣で感じた支援の本質を今後の利用者さんとの毎日の関わりの中で大切にしたいと思っています。

### 編集後記

新型コロナ感染症大変な施設へ派遣された上村支援員と笹原支援員のお二人は、お疲れだったと存じます。心から感謝いたします。しばらく、コロナの心配が無くならないと思われませんが、ないえ福祉会職員、利用者それにないえ会員の皆様のご健康を祈念いたします。「みみずく」も頑張っています。12号線を通る際はお立ち寄りください。

発行 ないえ会

079-0303 奈井江町字東奈井江 77 番地  
電話：0125-65-5301